

Title	チャールズ・ウィリアムズと『失樂園』の構成：「ミルトンの芸術性について」その二
Author(s)	宮西, 光雄
Citation	英文学評論 (1955), 2: 1-17
Issue Date	1955-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_2_1
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

チャールズ・ウィリアムズと『失樂園』の構成

——「ミルトンの芸術性について」その二——

宮 西 光 雄

大戦以来はじめてミルトン批評書を購入したのは、一九五〇年の晩秋のころであつて、それはC・S・ルイスの『失樂園』序論』と、T・S・エリオットの『ミルトン』であつた。エリオットのは一九四七年の講演を同年に出版し、そしてすでに一九四八年四版となつていた。ルイスのも一九四一年の講演で、そして一九四二年初版、一九四九年六版となつていた。この種の著書としてはどちらもかなりの読者があつたものと思われる。そして実はこの二書が、一九四〇年から今日にいたるミルトン批評の二つの重要なランドマークになつていたのである。一九三〇年代に展開したミルトン再評価に関するはげしい論争が一九四〇年代に推移するにあつて、ミルトニストたちにとつて再出発の衝動を強化したのはルイスであり、そしてミルトン再評価の論争の落着点を明示したのはエリオットであつた。ルイスはかれ独特の斬新な拠点にたつて学界を風靡し、エリオットは二十数年にわたる独自のアンティ・ミルトニックな評論を急角度に転向したからである。エリオットがルイスの言説のゆえに影響を蒙つたという事実はどこにも見あたらない。しかしルイスからエリオットへの道程に、なにかのつながりを想定することができるならば、それはチャールズ・ウィリアムズ (Charles Williams) のミルトン批評であつたように思われる。

ルイスの『失樂園』序論』が一九四〇年代のミルトン学界におよぼした影響は、一九二〇年代におけるド・ソラ

の『ミルトン・人と思想家』、または一九三〇年代におけるE・M・W・ティリヤードの『ミルトン』の影響にも匹敵するものであつた。そればかりではなく、ドニ・ソラ——ティリヤード——ルイスとむすぶ方向に、現代のミルトン研究における三段階の発展過程がみとめられるように思う。或る意味では、ルイスの学説は、ドニ・ソラとティリヤードとを揚棄して成立したものとみられるのである。しかしルイスに直接感化をおよぼしたのはチャールズ・ウィリアムズであつた。戦争中にウィリアムズがオックスフォード大学でした講演は深い感銘をルイスに与えていた。ルイスは『失樂園』序論』をウィリアムズに献題し、ウィリアムズに呼びかけながらつぎのように述べている。「その講演でああなたは、ミルトンについてすでにひさしく私が考えていたことを一部は先んじ、一部は確認し、そして大部分を明確にして完成した。」と。そしてさらにつづけて、「あなたは戦争がきっかけで、私たちのなかに投げこまれた迷走神経である。」とか、「私たち年輩者はもう聞けないものと長いあいだ絶望していたことを（他のさまざまなことといつしよに）聞いた、——それは『コーマス』についての講義であつて、しかもその詩の重点を、それをかいた詩人がおいたところにおいたものであり、——そして満員の『うらわかき人々が男も女も』、純潔の賞讃というような、これらの経験では珍らしく新しいことを、はじめはいぶかり、つぎには認容して、そしてついには心たのしく聞いているさまを見まもつた。」とか、「これまでの評論家たちはミルトンを読みかえすひまがなかつたので、たいていはあなたのミルトン批評を読みこなすことができなかった。」とか、「私があなたの著書を愛したのは私があなたの友人なるがゆえでは決してなく、はじめて私があなたの友情をもとめたのは、あなたの著書を愛すればこそであつたことを思ひだして、私は安全感をいただいている。もしそうでなかつたなら、ミルトンに対するあなたのみじかい『序説』が、私には然るべく思われるもの——念入りな百年あまりの誤解のあとで、正しい批評的伝統を復旧したもの——と信ずることは困難であつたであらう。」とか、「私はたしかに見たこの眼を信頼する資格があると思う。この牢獄にはしよつちゆうカギがかかつていながつたということは事実らしい。しかしそのドアのとり手をいじつてみようと思つたの

はあなただけであつた。」などと書いてある。「この牢獄」とは、未解決に放置されていたミルトン批評の問題点をさしたもので、「あなたのみじかい『序説』」とは、一九四〇年に改版されたワイルド・クラシックス叢書の『ミルトン英詩集』に新しくつけたチャールズ・ウィリアムズの十四頁の序文のことである。

エリオットは上述の『ミルトン』の冒頭にちかひとところで、「現代におけるミルトン擁護者たちは、ただひとつの著名な例外はあるが、すべて学者や教師であつた。私は、そのどちらであるというような資格はない。」とことわつて、そして文芸批評界においては学者と文芸作家 (practitioners) とが、たがいにそれぞれの業績を補足しあうべきことを主張した。そして学者の関心は、「傑作を作者の環境のなかに理解することや、作家が住んでいた世界とその時代の気質や、作家の知的構成や、作家が読んだ書物や、そして作家をつくりあげた諸影響」であるが、文芸作家の関心は、「作家より詩であり、それもその詩が現代詩人にとつてどのような用途があるのか、そしてさらに、未だ書かれてない英詩の生命力となり得るのかということである。」と説明した。そしてつぎのように述べている。「かりそめにも私に批評上の自負があるとして、私の所属する型の批評家による現代ミルトン批評の実例を、私はただひとつだけ掲げることができる。それはワイルド・クラシックス叢書の『ミルトン英詩集』に対する今は亡きチャールズ・ウィリアムズの序文である。それは包括的な論文ではない。それが著名であるのは、それがまず『コーマス』に対して、現代のどんな読者も接したことのないすぐれた緒論を提供しているからである。しかしこの序文をぜんたいにわたつて卓抜ならしめるものは、(そしてこのことはウィリアムズの批評書の大部分にあてはまることであるが)、著者の感情のあたたかみであり、そして著者がそのあたたかみを読者につたえることに成功したことである。この点では私の知るかぎり、ウィリアムズのこの論文はただひとつの例である。」チャールズ・ウィリアムズがエリオットと同じ型の批評家であるという意味は、ウィリアムズがエリオットと同じように詩人であつたことをエリオットが確認したということだけでなく、批評家としてのウィリアムズとエリオットのあいだには、そうした類似以上に同質的なもの

が存在することを暗示したもののように感じられる。しかも現代のミルトン擁護者たちのなかで、学者でも教師でもないただひとつの例外として、エリオットがわざわざ指摘したミルトン批評家とはすなわちチャールズ・ウィリアムズのことではないかと憶測される。しかもエリオットはルイスと同じく、ウィリアムズの『コーマス論』をとりあげて、そしてそれを絶賛しているのである。かく考えてくると、ワールド・クラシックス叢書の『ミルトン英詩集』につけたウィリアムズの序文は、その『コーマス』論を契機として、ひと筋のつながりを、ルイスからエリオットへのミルトン批評の道程に推定することを可能ならしめるようである。ウィリアムズは『コーマス』を、「一種の哲学的なベレー」とみため、そしてその祭典的なベレーの主題は、神祕の冒瀆未遂であつて、その神祕は純潔の神祕であり、そしてその純潔は、それによつてすべての悪が退散し、それによつて肉体は靈化し、それによつて高度の特殊な喜びが確保されるものであること、そして『コーマス』全体が魔法によつて動いていること、そしてそこに節制と従順と喜びの倫理がはたらいていること、そしてその従順とは、愛のなかへの自己滅却の法則であつて、これもまた一種の神祕であることを主張した。そしてその主張を、上述のようにルイスとエリオットがともに賞讃しているのである。ちなみに一九五一年のソープの編著『ミルトン批評・四世紀間の選集』では、一九二〇年代および一九三〇年代の代表的なものとしてドニ・ソラ（一九二五年）と、ティリヤード（一九三〇年）と、ランサム（一九三三年）と、グリアソン（一九三七年）をかかげたのち、ひきつづき一九四〇年代の代表的批評としてチャールズ・ウィリアムズ（一九四〇年）と、C・S・ルイス（一九四二年）と、ダグラス・ブッシュ（一九四五年）と、T・S・エリオット（一九四七年）の四人のものを採録している。ウィリアムズとエリオットのはそれぞれ上述の序文と著書の全文である。ルイスのは上記の著書の第七章と第八章にあたるもので、『二次叙事詩の文体とその弁護』という題名の抜萃である。ブッシュのは著書『十七世紀前期の英文学』の第七章『ミルトン』の大部分になつているが、これもまた、ウィリアムズと、ルイスと、エリオットの間に推定されるつながりに平行するものと考えられる。

チャールズ・ウィリアムズは多才で、批評のほかに詩や小説や劇も書いて、その著書は二十数冊をかぞえる。一八八六年に生れ、一九四五年に他界したときは五十九歳であつたが、その前年にも『万聖節の前夜』という小説を書いてゐる。しかしエリオットがウィリアムズを文芸作家 (practitioner) とみたのは、もちろん詩人としてのウィリアムズを認めていたからである。詩人としてのウィリアムズについては、昨年(一九四〇年)の二月に深瀬基寛教授が『芸術の運命』と題して翻訳された、ウエドレイの *The Dilemma of the Arts* の終りの方で、同教授の訳文を拝借するとつぎのように述べてゐる。「苦悩に際会して求むべき唯一の方法は祈りに訴へることだ。このことは多くの作家と多くの芸術家が最後に理解し得た結論であるように思われる。前世紀と比較するならば、われわれの世紀はほとんど宗教時代ともいふべき相貌を呈している。クロードルは一人のダンテ、一人のカルデロンと同等の地位を要求し得るところの、一大キリスト教的詩人である。T・S・エリオットもまたその一人である。英詩の若き世代への影響においてエリオットの影響に多少とも比較し得るものは、他の二人のキリスト教的詩人——ホブキンズと、(最近では)チャールズ・ウィリアムズである。」この訳書のとがきによると、この訳書の原本は一九四八年の英訳本であるが、それは二十数年前のフランス語版やロシア語版を、英訳者マーティン・ジャレット・ケア・C・Rが原著者との協力によつて改訂増補した決定版ということになつてゐる。そうすると、「最近では」ということばは、一九四〇年代をさしたものであらうか。ウィリアムズの詩の代表作は一九二二年の *The Silver Stair* と、一九一七年の *Poems of Conformity* であるが、ウィリアムズと若い世代の詩人たちとの関連はつまびらかでない。ただウエドレイの論述について興味ふかいは、ウィリアムズを影響力をもつたキリスト教的詩人として、T・S・エリオットやホブキンズと、ほとんど同列におくことによつて、ウィリアムズのミルトン批評が正しく理解されるように思われる点であると思う。チャールズ・ウィリアムズは、一九三〇年の『ホブキンズ詩集』(第二版)につけたかれ自身の序文で、ホブキンズをもつとも多く関係づけるべき詩人はミルトンであると断言した。その理由づけとしてウィリアムズは、ホブキンズとミルトンがと

もに、統御された世界というものを、その世界のなかにおける分割や、闘争や、危険なものと同時的に意識したといふこと、しかしながら他方では、宇宙の単一の統御力を確信して、それに似た知的な統御を自分にも他のものにもおよぼしたこと、そしてこの二人はどちらも、神祕家ではないけれども、神祕的な幻想にちかいものをもつていたことを論述している。以上のことは、前述の『コーマス』および後述の『失楽園』に関するウィリアムズの批評とも照合して考えるべき卓説であると思う。

さてチャールズ・ウィリアムズのミルトン批評は、上述の『ミルトン英詩集』の序文のほかに、かれの批評書である一九三二年の『イギリスの詩心』(*The English Poetic Mind*)のなかの論文『ミルトン』と、一九三三年の『詩心における理性と美』(*Reason and Beauty in the Poetic Mind*)のなかの論文『理性の神格化』と、そして『ランズン・マーカーリ・アンド・ブックマン』誌の一九三七年七月号に発表された『新しいミルトン』(*The New Milton*)とによつてうかがい知ることができる。そして以上三つの論文はだいたいにおいて『ミルトン英詩集』の序文に要約されているとみられる。『理性の神格化』と『新しいミルトン』は、ウィリアムズがミルトン再評価の論争を強く意識して、ミルトン擁護の確固たる論証をおしすすめたものであるが、当時はほとんど顧られなかつたようである。ミトニストとしてのウィリアムズの態度と主張が、ミルトン学界で、全面的にとりあげられたのは、一九四〇年の『ミルトン英詩集』の序文からであつた。そしてそのとりあげ方を強力におしすすめたのが、上述のC・S・ルイスであつたのである。ウィリアムズはその序文で、一九三〇年の著書『キーツ研究』におけるマリ、一九三四年の著書『イギリスの詩神』におけるエルトン、一九三六年の著書『再評価』におけるリーヴィス、および一九三七年の『研究論叢』のなかに発表された論文『ジョン・ミルトンの詩に関する覚書』におけるT・S・エリオットなどの、アンティ・ミルトニックな言説を綜合して、その要点をつぎの訳文のように、四つの項目に分類した。

- (i) ミルトンは悪い人間であること。

(ii) ミルトンは特に高慢な人間であつて、たえず自分自身の高慢については是認する態度で書いていたこと、(ブレイクの的はずれの警句——ミルトンは「われ識らずして悪魔に与よした」——が概してここに利用された)。

(iii) ミルトンの詩句は難解で、音響的で、鈍感であること。

(iv) ミルトンの題材は人間はなれがして、退屈であること。

(i) はマリの主張を、(iv) はエルトンの見解をとり入れたものである。(iii) はエリオットの感性論にもとづくもので、ウィリアムズは、ワーズワースの「感ずる知性」(feeling intellect) ということばを引用して、そうした知性の観点からの非難と解した。(ii) はいわゆる悪魔礼讃者 (Satanist) らのミルトン観を背景にして考えているのであつて、ウィリアムズのミルトン批評の焦点はここにある。したがつて、おもにこの焦点をめぐつて、以下の論述をこころみたいと思ふ。

ウィリアムズによれば、ミルトンの詩には、『ラレグロ』と『イルベンセロージー』と、教篇のソネットは例外として、最初の詩から最後の詩にいたるまで、その都度くりかえされるひとつの題材があつた。それは「戦争」である。その戦争はけつきよくミルトンの考えた善と、ミルトンの考えた悪との戦争であつた。その戦争は外面的でもあるが、内面的なものでもあつた。そして永続的な闘争というものに絶えず関心をもつ結果、ミルトンは二元論にならざるを得なかつた。しかしミルトンの詩のなかでは、戦争そのものが却つて調停役をつとめることによつて、そうした二元的な分割を統合することができた。ところでその戦争がなについての戦争であるのか、そして戦争によつてどういう調停が行われるかを知るためには、ミルトンの詩の技巧を検討しなければならぬ。ミルトンは、シェイクスピアやワーズワースにくらべて、はるかにもつと意識的な芸術家であつて、はるかにもつと配列をこころみている。『リシダス』がそうであり、『闘技者サムソン』がそうであり、『失樂園』がそうである。『リシダス』の悲しみは、完

全に真実な悲しみではないといわれてきた。もつと確実なことは、『リシダス』が意識した悲しみであり、そしてさらに自己意識的な悲しみであるということである。そのような自己意識は、ミルトンの詩句には最初からあつた。『キリスト降誕の朝によせる頌歌』は、キリストを歌う才能があるかどうかを、それ自身にききただしている。そのような自問自答をこころみる詩は他の詩人にもある。しかし重要なことは、ミルトンの詩が儀式的であつたということである。しかもミルトンの詩は、自己意識的であつたがゆえに儀式的であつたのである。正しく用いられた儀式的の利点は、儀式が自己意識に場所をあたえ、そして果された役目、または行われた祭典を意識しているうちに、自己意識が滅却されるような方法をあたえることである。そのように詩がその儀式的のなかに、自己意識を吸収するところに、ミルトンの詩の技巧があるのであつた。『失樂園』のセイタンはどんなにヒロイックであり、どんなにエネルギーであり、そしてどんなに雄渾荘麗であろうとも、ミルトン自身の意識的な技巧的な、そしてさらにエネルギー的な無韻詩のワクのなかからは、一步もはみだしていないという事実に思ひいたらなければならない。——以上に述べたことは、ウィリアムズの『イギリスの詩心』における主張の主要である。ところがルイスは、『失樂園』序論において、観点はことなるが、宮廷詩として発達した叙事詩が、本来儀式的なものであることを論拠にして、『失樂園』の文体を儀式的なものと、修辭的なものにむすびつけて解明した。そしてエリオットは一九四七年の『ミルトン』のなかで、「行の美しさを文脈によつて生かすことのできる完全なユニークな型をあらゆる文節にあたえ、かくして生ずる文節ぜんたいの音楽的効果と特殊な感情とは、ミルトン独特の練達な技巧によるものであつて、それはもつとも非凡な知性のエネルギーをしめすものである」と主張した。かれこれ考えあわせると、ウィリアムズの批評的感覚のたしかさがうかがわれる。さらにウィリアムズのことばをたどつて述べるならば、『失樂園』の構成にあつては、戦争が物語の題材であり、人間に対する天道の正しさの弁明が詩の題材であり、そして自由意志が知性の題材となつている。『失樂園』の冒頭において、人間の最初の不従順——すなわち、人間の始祖が自分の意志にそむいたことが

主題であると明言されているが、人間の始祖が自分の意志にそむいて罪をおかすにいたつたことは、そしてその動機は、ミルトンの詩句のなかに読みとらなければならない。

ウィリアムズは、ミルトンの生活と詩についての見方に、二つの重大な改変が最近に行われたことを述べ、そこから「新しいミルトン」を提唱した。その改変のひとつは、ミルトンの初婚のデイトが一六四二年の五月か六月かに決定されたことであり、もひとつの改変は、ミルトンがセイタンを愚か(silly)だと想像したことへの理解である。ミルトンの初婚のデイトの改変についての経緯は、ウィリアムズの論文では知ることができないが、まずジョン・S・スマートの談話に端を発し、一九二五年のドニ・ソラの『ルヴ・アングロアメリカヌ』誌上における暗示を経て、一九二八年のバーンズ・マーティンの論文『ミルトンの初婚のデイト』ではほぼ立証され、一九三〇年のジョン・ペイリの『ミルトン』においてはすでに認容されたが、さらに一九三一年のB・A・ライトの論文『ミルトンの初婚』と、一九三二年のヘレン・ダービッシュャーの編著『ミルトンの初期伝記集』とによつて確証され、一九三四年のローズ・マコーレイの著書『ミルトン』ではもはやなんの疑念もなく記述されている。従来の一六四三年説のままであると、その同じ年の夏、新婚ひと月あまりの楽しかるべき同居生活のさなかに、当時の敵味方のクリスチャンを慄然たらしめた離婚論を書きあげて発表したという、すこぶる非人間的なミルトンになつていたのである。改変された一六四二年説は、なによりもまず、この非人間性をミルトンから脱却せしめることを可能にした。ウィリアムズはこのことを第一の論拠としてとりあげたのである。従来のミルトンは、高慢なピューリタンであつて、最良の場合ではどこことなく品位をそなえ、最悪の場合では有害な非人間性をもつていとみなされていた。尊大な孤高と憎しみによつて、こりかたまつた「花崗岩」がミルトンであると思われていた。ミルトンはわれわれに堪えしのぶ方法を示すことはできても、愛する方法を示すことはできなかつたとみられている。しかしウィリアムズは言う——「ロマンティックな愛は、優美と権威と喜びをたたえるひとつの驚異であることを、ミルトンは忘れていなかつた。……ミルトンは、多く

の読者がかれの詩のなかには見ようとしなかつた人間性の自然な活動範囲を、かれの生活のなかにもつていた。」と。第二の改変は、『失樂園』に存在しながら無視されてきた喜劇の要素を、ありのままに表明することであつた。そしてそうすることが、『失樂園』をわれわれ自身の日常の経験に直結せしめることになつた。セイタンを愚者と見ることによつて、『失樂園』に喜劇的な要素を発見したのはウィリアムズ自身である。ウィリアムズのことを訳述すると――

『失樂園』が喜劇であると言うことは、おそらく真実ではないであらう。しかし『失樂園』のぜんたいに喜劇の要素がみなぎつていふと言うことは、たしかに真実である。この詩を音響的なオルガンとする伝統的な見かたと、その作者を極度のエゴティストとする伝統的な見方とが、相互に支持してきた。自然なことも愛情的なこともなし得なかつたミルトンなるものと、人間の現代生活とはなんの関係もない詩句というものが、相互に反映してきた。そしてそうした原物にも鏡にも、微笑はほの影だにないのである。しかし実際は、この詩もこの詩人も、たしかに微笑(smile)する。どちらも高笑いはいしない、どちらもダンテと同じように、高笑いには反抗する、どちらもダンテとともに、「似つかわしく自制して笑う」のである。しかし『失樂園』のなかにある笑いは、――そしてミルトン自身の生活においてもおそらくそうであつたであらうが、――ダンテの『コンヴィヴィオ』のほとんど最高度に甘美な一節のなかで話題になつたつぎの笑いに似ている。「口もとにあらわれる心のがたは、ガラスの下の色にも似たり。笑いは、心の喜びの閃めきにあらずしてなんぞや、内にあるがままのすがたして外にあらわれる輝きにあらずしてなんぞや。……ああ、わがもの語るわが恋人の、目にもみ見ゆるその微笑ほほえみ！」

この「レイディ婦人」は、その正体を或る似すがたでしめすと、「哲学」であつた。そして『失樂園』に存在する心の喜びの閃めきもまた哲学的である。その閃きは、創造されたどんなものでもが、それ自身の利益のためには崇敬すべき全能の「愛」をも攻撃するといふ觀念を、そしてその幻想をもあざ笑うすばらしい笑いである。この閃きはまた、セイタンにおけるセイタンを擬視するときの、この詩の同情的な哲学的な目のなかに見られるのである。この閃めきはまた、セイタンの実際の力と美徳をゆるし、さらに賞讃さえもするのであるが、しかしセイタンのいつさいを目に見ることをも主張するのである。ところで地獄におけるセイタンのひとつの要素は、叛逆天使軍が全能の神を危うくしたということを、センタンが心から信じきつていられるらしいことである。

神の全力に反撃の力もてはむかへば

天国の平原に勝敗は決せず

神の玉座を震駭せり。

……(巻一、一〇三—一〇五)

His utmost power with adverse power oppos'd

In dubious Battle on the Plains of Heav'n

And shook his throne ...

われわれはその瞬間にはそうだと信ずるかも知れない。しかしながら間もなく、セイタンが見当ちがいをしているにすぎないことが明瞭になる。その事実がセイタンを笑うのである。その事実というのは、セイタンが神の玉座をゆるがすようなどんな近くにも来ていなかったということ、神が全力をたかねばならない事情は曾つてなかつたということである。そしてまた、【神の子が反逆天使軍のねがいに応じて戦つたのは

…ただ力もつ

かれらはすべをはかり、他の優秀を

きよわねばこそ……

……(巻六、八二〇—八二三)

… since by strength

They measure all, of other excellence

Not emulous, ...

であるが】神の子はかれらの絶滅をさけて、一斉射撃をみずからそのなかばで中止しなければならなかつたことである。神の子みずからが、自己本位の愚かさをあざ笑う天の笑いになつてゐる。

静かなる、清き面もて

神々しく、きもいえず、安らげし稲光りして

……(巻五、七三三—七三四)

… with calm aspect and clear

Lightning Divine, ineffable, serene, ...

そのような稲光りは、「愛」のすべての敵をおごそかに嘲笑するがゆえに、より偉大な場面に高揚された心の至純の閃めきに似たものである。

このような明白な正確さを理解することが、セイタンについての、それゆえにこの詩についての、最初のわれわれの見解に大変革をおこすのである。ミルトンにはヒューマリーのセンスがなかつた、と従来いわれている。そしてまた実際、『失樂園』のな

かには冗談はあまりない。しかし上述のような、静かに楽しい喜劇の要素が存在しているのであつて、そしてその存在は、しばしば想像される以上に遍在しているのである。

『失樂園』の解釈上のいくつかの難点のひとつに数えられていた、「神の玉座を震駭せり」について、このような喜劇的解釈をくだしたのは、チャールズ・ウィリアムズの卓抜な識見によるものであつて、ルイスはこのことを全面的に推賞した。そして、「ブレイク以後、ミルトン批評は誤解のなかに見うしなわれている。そしてその正しい道筋が再発見されたことは、チャールズ・ウィリアムズ氏の序文がでるまではまずなかつたことである。」とルイスは言明した。ルイスとウィリアムズとのこの見解の一致は、この両人の名をたらねて相手どる論駁をあちこちに惹起せしめることになつた。一九四四年にはE・E・ストールが『悪魔にも五分の理あり』という論文を発表し、一九四五年にはマグレイヴが『悪魔はベカか』という論文を書いている。そのほかにも同種のものが数篇あるようであるが、なかでも代表的なのは、ハミルトンの一九四四年の著書『英雄か愚者か』である。これはローリが、一九〇〇年の著書『ミルトン』でつぎのように述べていることのむしかえしにすぎない。「セイタンは、われわれにプロミーシユースを思ひださせずにはおかない。そして本質的には差異はあるけれども、われわれにその差異を本質的なもの感ぜしめるようにはなつていない。全能の神に対する大胆不敵な反抗者としてのセイタンの事情そのものが、セイタンを愚者か英雄かのどちらかにするのであるが、われわれにセイタンを愚者と思わせておくようなことを、ミルトンが実際にしているのでは決してない。」ラージャンの一九四七年の著書『失樂園』と十七世紀の読者』では、セイタンに対して、ベカか英雄かの二者選一の立場を避けている。しかしまた、セイタンは英雄なるがゆえにこそベカになつたという見かたも成りたちはしないであろうか。セイタンにかぎつて、自分がベカであるという自意識はないのである。セイタンがベカであるというのは、人間的な相対感によつて理解されるべきことではなくして、神の絶対的な観照の尺度にあわせてはじめて決定されるのである。したがつてチャールズ・ウィリアムズは、ハミルトンの主張する、あるいは

ローリの解説する、セイタンの英雄としての雄大さと、勇壯と、反逆と、不羈奔放と、人間性については十分に理解しているのである。セイタンのすべてはミルトンがすでに許容しているのである。つまり、『失樂園』の無韻詩フランクウェム
フランクウェムが、そうさせているのである。ミルトンのプライドと反逆精神と自由意志とが、『失樂園』の第一巻と第二巻におけるセイタンに共感しているのである。T・S・エリオットは一九五三年の『詩の三つの声』で、「私は、作家がかれ自身をいくらかを作中人物にあたえるものと信じているが、作家はまたかれの創造する作中人物によつて影響されるものであることをも信ずる。」と述べている。しかしまたそれから教員さききところで、「われわれには、セイタンに対するミルトンの同情が、ミルトンを悪魔の味方と確認するほどに、一途(exclusive)であると想定する理由はない。」と述べている。この二様の見かたは、そのままチャールズ・ウィリアムズの見解であつたともみることがができる。ただウィリアムズは、『失樂園』の構成を調和的なバランスにおいて考えるべきことを強調したのである。そうしたバランスとは、ウィリアムズが好んでもちいたことばをもつていえば、『失樂園』のなかで、「自然発生」(self-begot)というセイタンの信念に、「愛からの派生」(derivation-in-love)という正しい信仰を対抗せしめたことであり、セイタンの「阻害なれた真価」(injured merit)という觀念や、「尊大な侮蔑」(high disdain)というような態度に対して、「自由なる奉仕」(freely serve)とか、「自由なる愛」(freely love)というようなヒューマニスティックな觀念や態度を対立せしめたことであり、さらにセイタンの「自尊」(pride)と「情慾」(passion)とに對して、「謙虚」(humility)と「理性」(reason)とを君臨せしめたことである。かくして正しい秩序をあたえられるヒューマニスティックなバランスのなかに、『失樂園』の神学と哲学と道徳と、そしてその偉大なる詩が成立するのであつた。そしてそうした構成のキー・ポイントはすなわち、『失樂園』のなかにみなぎる喜劇的要素であり、それと同時に、『失樂園』の重荷をみずから背負つて強力に堪えてゆくミルトンの無韻詩フランクウェム
フランクウェムそのものでもあつた。チャールズ・ウィリアムズは言明した——

「すべてのものは、神の永遠の眼の下で起る。しかしまたすべてのものは、あの偉大なる十音綴の進行する限界内で起

る。セイタンは神に対する反逆者である。しかしかれはまた或る意味ではこのブランク・ヴァースに対する反逆者でもある。いかにもかれはそのブランク・ヴァースを口にする。そのことは神学的に確実である。セイタンはただ、神がかれに与えた力によつてのみ反逆することができるにすぎない。『不変なる、不滅なる、無限なる』(immortal, infinite)といつて例の不可抗な文体はころがつてゆく。それを読みすすむのをやめることがほとんど不可能になるときがある。このブランク・ヴァースこそは、読者のたてづく心の弱さを、その後ひきすすつてゆく。」と。ドニ・ソラが著書『ミルトン・人と思想家』において、『失樂園』のヒーローを作者ミルトン自身であると断定したことを思いあわすならば、ウィリアムズの主張の真意は正しく理解されるであろう。セイタンを拒否するのはミルトンの想像力であつて、単なる知力のみではないことをウィリアムズは断言している。そしてそうした想像力の存在を立証するために、『失樂園』第四巻のはじめにあるセイタンの独白のなかのつぎの詩句、特に後の一行を好んでウィリアムズはたびたび引用した。

果ては自尊と、さらに悪しき野望に、われ転落せり

天国にて、天国無双の帝王と戦いて

Till Pride and worse Ambition threw me down

Warring in Heaven against Heavens matchless king:

ウィリアムズによれば、この matchless の一語に問題のすべての重点があつて、『失樂園』におけるいつさいのベランスが、この一点にかかつているともみられる。matchless とストレッズするリズムと、そしてその不可抗な直截な発音は、まさにミルトンの想像力の志向を決定したものである。

『失樂園』のヒーローをセイタンとする説には、二様の論拠がある。ひとつは古来の叙事詩論であり、他はロマンティシズムの文学論であつた。すなわち、叙事詩の成立条件はエネルギーな英雄的人物である、という先入観と、詩は無意識からの自然発生である、という文学理論とであつた。前者は遠くドライデンにはじまり、近くは、ア

バクロンビの『叙事詩論』(一九一四年)にいたる伝統があり、後者はブレイクからシェリ、マッソンを経て、ローリーの『ミルトン』(一九〇〇年)におよんでいる。そしてまたこの二様の論拠がしばしば混淆することによつて、セイトンは、セイトンならざる他の何にもかにデッチあげられてきた。アバクロンビはつぎのように論じた。「従来、セイトンは『失樂園』のヒーローだといわれている。この評言が未だに感ぜしめる不愉快さは、ヒーローということばの誤用によるものである。そのことばの意味は、たしかに、たれかひとりの作中人物のために『失樂園』が存在するとしたならば、それはセイトンであるという単純な事実なのである。『イリアッド』がアキリーズのために、『オディッセイ』が、オディッシュースのために存在するのとまったく同様である。『失樂園』の不滅の意義は、セイトンという作中人物にこそ集注している。セイトンの甚大にして執拗な悩みは、近代的意識の深刻な二律背反を象徴するものである。」テイリヤードは一九三〇年の著書『ミルトン』において、『失樂園』の意義を、「意識的」なものと、「無意識的」なものに分析した。そしてセイトンの英雄的なエネルギーに対するミルトンの無意識的な共感や、オプティミスティックであるべき意識的な意図のなかに、無意識的なペシミズムがみとめられることなどを指摘しながら、『失樂園』に「ありうべき矛盾」を強調するまでになつていた。一九三七年の著書『ボライト・エッセイズ』でエズラ・パウンドは、例のアンティ・ミルトニックな酷評をしたのち、後世の批評家たちが悪魔を『失樂園』のヒーローに見たてたことは、その作品ぜんたいを無意味にするものと断言した。これこそまさに頂門の一針であつて、叙事詩論や、無意識論のいかんにかかわらず、セイトンをヒーローとする説や、それに近いいつさいの見解を破碎するものである。『失樂園』はもちろん、ミルトンのすべての作品には、かれ独得の芸術意識が浸透している。ミルトンの芸術性に関するかぎり、意識と無意識とは、水と油のような「矛盾的」なものではなく、次元を異にする意識の「二律背反」でもなかつた。ミルトンの意識を水面上の氷山とみるならば、ミルトンの無意識は水中の氷山であつた。というよりはむしろ、地上にある樹木の枝葉と、それに連続する地下の根との関係に譬うべきものであらう。ミルトンの

芸術性が発現する場にあつては、「意識」の純化する極致に靈感の「無意識」があり、そしてそうした「無意識」の延長に「意識」の技法が成立したのである。『失樂園』第九卷二一行以下のつぎの詩句は、無意識的な自然発生にもとづくロマンティシズムの詩論を言明したものでなくして、ミルトンの芸術意識が、たび重なる努力と修練によつて、無意識的に純化する經驗を表明したものであつた。

わが天上の守護神は

こいねがわねど夜ごとわれを訪い給い

たやすき口授クワシカク靈感の夢まくらに

わがたくまざりにし詩句ぞ授くる

アラン・H・ギルベートは、一九四七年の著書『「失樂園」の構成について』の序文で、「ミルトンの偉大な業績は、それを構成するにもちいた努力の跡をしめしている。」という結論に達したことを述べ、さらにつきぎのように主張した。「ミルトンは『古典的』クラシカルである。もしもそのことばは、ミルトンが創作をはじめる前に、一全体としての作品を立案するのにミルトンが苦心したということの意味するならば、しかしミルトンが詩句をつくりはじめたときには、かれの発明力を休止させたであろうか。ミルトンはいつでも、ユーレイニアが新鮮なものをもつて還つてくるのを待ちかまえていたように思われる。そしてあらゆる種類の改変を頻繁にすることも進んでしたように思われるし、切つたり、継ぎはぎしたりすることにも卑屈を感じずることはなかつたように思われる。……私にとつては、超人的な確かさをもつて一度つきりて書きあげたミルトンよりも、入れかえたり改変したりしたミルトンの方が、よりすぐれた芸術家である。」ユーレイニアというのは「わが天上の守護神」と同一であつて、ミルトン特有の詩神である。その詩神の訪れを待ちかまえていたというのは、前後の文脈からもたやすく察知されるように、ミルトン自身の芸術性が、靈感的に純化するのを待機した意味である。しかしティリヤードは抗弁した——「ロマンティックな批評家たちが、理性を排して情熱にくみする偏見を、どんなに多くいだいていたとしても、おそらく、十九世紀の感情の堅固なハカ

リが、すっかり狂つていることにはなるまい。」と。主知主義のパウンドは、ロマンティックな十九世紀の感情のハカリに、はげしく抵抗した。チャールズ・ウィリアムズは、知性の立場ばかりでなく想像性の立場からも、ミルトンが「われ識らずして悪魔味に与した」というブレイクの警句を、「的はずれ」(Incorrect)だと明言した。しかしミルトンに対して態度を異にするウィリアムズとパウンドとは、それぞれの評言のアクセントにおいて雲泥の差異があつた。けつきよくは、ウィリアムズが論証したように、ミルトンの共感をいざなつて活躍する場面のセイタンといえども、ミルトンの喜劇的なベランスによつて意識的に配置され、ミルトンの無韻詩プロシメトリックの強靱なワクのなかに捕捉されていたセイタンであつた。それにしても、『失樂園』をペシミスティックにしたものは、人間における邪惡の根強さについてのミルトンの現実感と、そして牧歌的な愛と美と善のユートピアに憧れるミルトンの郷愁であつた。そしてそのミルトンの郷愁もまた、エドモンド・スペンサーの詩境に通ずるように思われるのである。(つづく)